

サケ川の伝統に組み込まれた、資源を守るしくみ

都市の川を 現代のコモンズに



菅豊 すがゆたか

東京大学東洋文化研究所助教授
1963年生まれ。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科・民俗学・博士(文学)。国立歴史民俗博物館助手、北海道大学文学部助教授を経て、99年より現職。主な著書に『現代民俗学の視点』(分想執筆、朝倉書店、1998)、『景観の創造』(分想執筆、昭和堂、1999)他

コモンズとは何か

コモンズという言葉が盛んに使われるようになったのは、生物学者ガレット・ハーティンが1969年に書いた「コモンズの悲劇(The Tragedy of the Commons)」がきっかけです。彼はイギリスの伝統的な土地利用形態であるコモンズ(共有地)を題材に、「共同で利用される資源は、速からず荒廃していく」ということを「牧草地の悲劇」という例で説明したのです。仮に、ある限られた牧草地の中に、10頭ずつの羊を持っている4人の農夫が放牧をしていると仮定します。羊が牧草地にかける負荷は4人が均等に負担しています。しかし、ここで、するい人間が1人いて、ほとんど自分の羊を増や

そうとしたとします。その人間が1頭増やすと、その利益は増やした人間のものとなる。一方、1頭増やしたために土地にかかる負担は4人で負担しなければならぬ。そこで、残りの3人も単純に損しないように1頭ずつ増やし、最終的にこの牧草地は減産してしまうのです。

この話のポイントは、自分からこのゲームをやめられないということ。なぜなら、羊を誰かが増やすと自分が損してしまつたため、増やし続けねばならないという悪循環に陥ります。この牧草地で起るジレンマ状況を、ハーティンは地球に於いてはじめて説明したので、地球規模の問題です。地球全体の中での資源を維持するためには、どのように利用したらいいのか、どのようにしたら地球に負担をかけないか、という大きな問題を説明するたために、イギリスのちよつとした小さな事例を扱つたのです。

ハーティンはコモンズの世界を、みんながただ乗りをするフリーライダーの世界と捉え、管理が存在しないと考えると、現実を正しく見るとそうではなく、共同で管理されているコモンズにもさまざまな管理形態や使用形態などのシステム、ある種のコントロール・メカニズムが存在する。そして、その

ような管理システムが資源の持続可能性を保つのに役立つだろう、と一般の人々も期待したのです。私は「資源利用が特定集団に限られる」という原則によって決められたある規則に則って管理され利用される共的資源、それらが存在する空間、これをコモンズと表現しています。

とはいながらも、現在、コモンズに関して、二つの意味があまり区別されずに使われているように思えます。

一つは、「資源そのもの(共同で使う可能性を持つ) (Common Pool Resources)」です。文字通り、海、川、森林、など資源そのものを指します。

もう一つの意味は、「共同所有の資源 (Common Property Resources)」で、資源とそれを取り巻くシステムの両方を表します。どちらも、よく「P」と略され、文脈によって使い分けされたり、区別せずに使われています。

「共同所有の資源」という後者の言葉を使うときは、どのように人々が共同して資源を利用し、共同で分配、維持管理しているかというシステムに目が向きます。今回も、ただコモンズというときは、こちらの意味で使います。

一方、前者には、そのようなシステムの意味はありません。みんな

ながアクセスしたい資源そのものではないので、個人で独占することも、国が独占することも、みんなが使うことも可能で、この言葉には、資源をどう所有し利用するかという意味は本来含まれていないのです。

例えば、アワビの例を考えてみましょう。アワビそのものは単に前者の「資源そのもの」です。

しかし、アワビの生息数が常に一定以上になるようにするには、再生可能な漁獲数を越えて乱獲しないようにするにはなりません。そのために、漁場が設定され、漁場で操業する権利つまり利用権が設定されて、それを組合などが管理します。さらに、操業制限が行われたり、誰かが密漁をしないように監視し、それを破ると相應の制裁措置がとられたりしなくてはなりません。こうなると、アワビそのもの、アワビが採れる漁場、利用権、管理組織、これらを含めて「共同所有の資源」と呼ぶことができます。

資源といつてもいろいろある

今コモンズの話をしました。そこで人々は何を資源として見ると、二川が資源である」と言つて

都市の川を現代のコモンズに

も、川全体が資源なのか、川の水が資源なのか、魚が資源なのか、いろいろな見方ができます。

そこで、こうした資源を「資源系」と、「資源素」が複合して存在する場としての「資源系」に区別するとわかりやすいと思うのです。先ほど挙げたように、川、つとつても「水」そのものや「魚」さらには「発電源」、「航路」(飲料水の供給源)としての川など、人が川に見出している資源の要素はさまざまです。このように「資源系」とは、人がそれぞれに資源として見出している「要素」を指しています。

一方、川、海、山などは実体としてあり、かつ、いろいろな資源素を内包しています。そこで、さまざまな資源素を内包しているような資源の総体を「資源系」と呼ぶことができます。その資源系の中に、多様な利用価値を持った資源素を、人が見つけたと考えるとよいわけです。

このように捉えると、例えば、資源系のレベルでは「川を守る」と同じことを言っているようにいっても、資源系のレベルまで下りて守ろうとすると、あちらを立てればこちら立たずになることも多い、ということが分かってきます。川にダムを造り水資源を確保することとは、川という資源系の持つてい

る「水資源」という資源素を大きくしますが、そうすると魚が上流に上らなくなるといふ、別の資源素が衰退することになる場合があるようにです。

同じ川でも、このような資源素の組み合わせがいろいろあり、それが大切な状況によって変わるといふことです。人々はそれぞれの地域で、それぞれの資源を見出し、その利用法を取り巻く背景に人間関係がついてくる。この連鎖関係を見ないと、なぜ住民同士の争い、住民と行政の摩擦等が発生するのかわからないし、それがわかれば対処の方法も考えられるようになるはずで

資源系、資源素、地域の条件、それを取り巻く人間関係、場所により異なるこれらの連鎖をきちんと捉えないと、コモンズの話も始まりません。

コド漁

私は、新潟県岩手郡の大川という川に、20年前から通っています。ここでは、コド漁という古いサケ漁が行われてきました。

サケ漁は、それにかかわる中で、いろいろな人間関係を作つたり、川を保全するという機能を持つています。いわば、利用しながら守

っている例です。しかし、漁師が「川をきれいにして」と考えているわけではなく、サケ漁をするのがサケが上ってくる環境を作ることにつながり、環境保全と一致します。自然環境と関係を持ちながら利用するという行為をとおして、生活の中に実益を取り込んで環境を維持、保全する方法があることを下感させます。

ここで自然と人の関係を判断する基準として私が参考にしてきたのが、前代から伝わってきたコモンズの「伝統」です。コモンズは、長い間そこに住んでいる人が、必要に応じて資源を利用してきた歴史の安定した到達点だからです。安定しないと、利用すべき資源はずに消えてしまつてい

は、ある程度資源量が確保されて続けているという歴史的背景があるというところは、社会の中で安定したポジションを得た、つまりその時代状況にあつてはうまくいっているという一つの証明になりうる、と私は考えています。

コド漁というのは、コドという仕掛けの上で、3時間10分と待ち、漁具で引つつかせ、非常に効率が悪い漁です。なぜ、こんな効率の悪いことをするのか問題です。現に、大川の河川ではこのような漁法は継承されています。



上:コド漁
下:大川
写真提供:菅豊



実は、2500年前、大川沿岸の隣同士のムラで漁場争いがあり、塚を築いて境界を漁場というところで落ち着いた事件がありました。また1872年にも、隣村との間に「川はムラのもの」では済まず、「大川流域全体の共有の空間」として認識されることもあり、1796年に上流の集落が連合して、下流の集落で行った流し網漁の差し止めを要求しました。流し網でサケを根こそぎ捕まえてしまうためにサケが上流に上つてこ

談判をしたのです。流し網のほうがかド漁よりずつと効率的ですが、明治維新の時点では消えています。コド漁が残った理由は、多分上流の漁師の言い分が認められたからでしょう。

近世の津軽石川(現、岩手県宮古市)などでは、サケが漁の重要な投資対象になりました。すると商業資本が入り、支配者の論理からサケ漁の権限をムラから取り上げて独占してしまいました。それに比べると大川が幸運だったのは、江戸時代に支配者が頻りに変わり、統一的な川管理の政策がで

期待できるわけでは
例えば、川岸に点在する小屋には漁をする人々が集まり、酒を飲

このサケ漁のベースには、ムラ社会のつきあいがあります。コモンズを支える人間関係がないと、コモンズは維持されません。しかも一方では、サケ漁が人間関係をつくる側面もあります。サケ漁が人間関係をつくり、人間関係がサケ漁を生むという、相補い合う関係が存在するのです。つまり、川をコモンズとして利用したり川を守るという行為は、川に関わることでコミュニケーションをつくる効果も期待できるわけでは

て、自分たちの日常必要なものを作っていたことは、間違いないで

み、漁をだしに人間関係を楽しんでいいます。このような場でサケ漁の情報は伝わります。例えば、下流で昨日甚兵衛が取り損ねたのはすごい大物だったぞ」という話が上流に伝わると、それは橋の所で与作が捕った」というような話が伝わってくる。誰かが捕り損ねたサケを捕るのも、且頃のつきあいで情報を共有する関係から生まれる名譽なのです。見、サケが捕れてうれい」と見えることも、実はもつと複雑で、いろいろな楽しみが込められているのです。だから、彼らはコド漁を捨てないと言います。一方、そういう論理は、行政側ではなかなか理解できません。大川では、女性が河原で畑をつくっています。砂地の小さな畑は、家庭菜園のようです。特に中流域は河原が広いので、モサイク状に広がっています。こういう所に伝統的な作物が残るのです。豆でも、古い、自分の所ではしか使わないような、商売にならないものを植える。自分で食いたいものを育てるわけです。赤カブもつくります。もう稼ぐ必要のないという人は、自分の所有する畑はほうっておいて河原畑で食べるくらいのものである。

昔は、無所有権が河原を開拓して、自分たちの日常必要なものを作っていたことは、間違いないで

川には、俺たちの川」という村ごとの小さなコミュニティで捉えられたコモンズの意識と、大きな流域から見たコモンズという意識が二重に存在します。また、それらを運用するシステムも重層化しています。さらに落しこめて「川のこの場所は俺のものだ」という個の意識もある。こうした感覚が、川の所有意識の萌芽なのである。

彼らが、ここにきて釣りをする部会人と明らかに違うのは、彼らがここで歴史と、その歴史の背景に存在する社会システムを背負っているからです。彼らは、自分たちの社会システムをちゃんと持っています。そういう社会システムが結果として、川の保全につながっています。

川には、俺たちの川」という村ごとの小さなコミュニティで捉えられたコモンズの意識と、大きな流域から見たコモンズという意識が二重に存在します。また、それらを運用するシステムも重層化しています。さらに落しこめて「川のこの場所は俺のものだ」という個の意識もある。こうした感覚が、川の所有意識の萌芽なのである。

人間関係とサケ漁は互いに影響し合う関係

川には、俺たちの川」という村ごとの小さなコミュニティで捉えられたコモンズの意識と、大きな流域から見たコモンズという意識が二重に存在します。また、それらを運用するシステムも重層化しています。さらに落しこめて「川のこの場所は俺のものだ」という個の意識もある。こうした感覚が、川の所有意識の萌芽なのである。

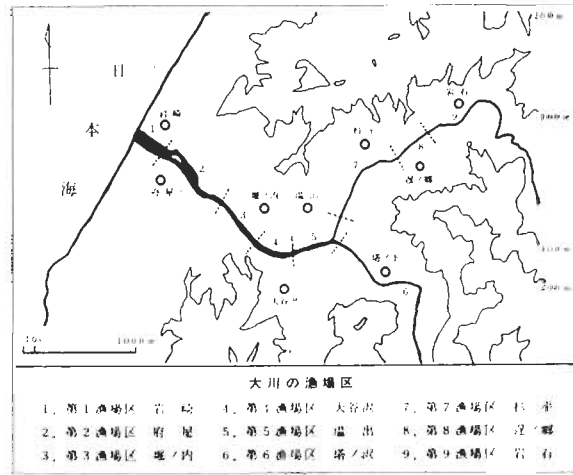
意図せざる結果をもたらしシステム

川には、俺たちの川」という村ごとの小さなコミュニティで捉えられたコモンズの意識と、大きな流域から見たコモンズという意識が二重に存在します。また、それらを運用するシステムも重層化しています。さらに落しこめて「川のこの場所は俺のものだ」という個の意識もある。こうした感覚が、川の所有意識の萌芽なのである。

都市の川を コモンズにする戦略

昨年1月に、「河川敷に不法菜園」と見出しのついた新聞記事を、目にした。東京都江戸川区、新中川での話です。河川敷を菜園として利用している人たちがいる。その人達に河川管理事務所が立ち退き命令を出し、最終的には強制撤去しました。大川の河原畑ではうまくいったものが、都市ではうまくいかなかったわけでは

行政側への意見としては、管理を強く捉えているというのが私の印象です。河川敷に管理事務所は防災の観点から危険であるからアクセスするなという。この考



ムラごとに大きく分けられた大川の漁場区(上)は、ムラの中で各個人に割り当てられるために「場所」割り(右)がされている。右図は「じいちゃん」の住むムラの例。

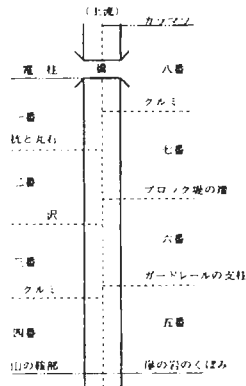
下:川分けの入札状況。表頭の1~8の番号が「場所」割り図の1~8に対応している。

入札参加者	1984年度の入札状況 (単位:円)								合計入札額	平均入札額
	1番	2番	3番	4番	5番	6番	7番	8番		
じいちゃん	15,000	10,000	75,000	100,000	14,000	86,000	25,000	85,000	410,000	51,250
A	20,000	51,000	105,700	128,000	10,000	42,500	10,000	35,000	402,200	50,275
B	20,000	76,000	30,000	165,000	20,000	80,000	25,000	30,000	386,000	48,250
C	20,000	41,000	60,000	80,000	56,000	68,000	10,000	43,000	381,000	47,625
D	35,000	30,000	73,000	102,000	39,000	60,000	10,000	30,000	375,000	46,875
E	25,000	35,000	55,000	75,000	18,000	45,000	19,000	55,000	327,000	40,875

注・印がついているのが落札者



大川の河原に広がる河原畑。自分で食べたいものをつくる。(写真・図表提供:香野)



「川分け」コモンズのオーケシジョン

サケ川というのは、川でサケを獲る権利と場所を意味します。そのサケ川の権限はムラに帰属します。ムラごとに入漁場区に川を分けています。その川の漁場区を、さらに個人の場所に分けるのです。昔は、ムラのいろいろな義務を履行する人は、サケ川漁業に加入できると定められていました。そして、村の総会と自治会費を納める寄りが年2回行われ、その内の1回の席上「川分け」という入札をします。場所の数以上に組合員がいたという具合ですから、希望者全員には当たりませんでした。それだけの場所に値段をつけ、番高い値をつけた人が落札します。

川分け」という仕組みがあります。入札を開封する前に一度だけ値段を変えるチャンスを与える仕組みです。100円足すとか、5000円引くとか言います。これをオープンにして決着します。サケを捕るだけではなく、

でも水が濁っていると自動車。こいで、みんなで上流に上がっていく。するとトラックが走りついていく。という例もありました。一何で俺たちが言わないで、上流で工事するんだ」と役場に駆け込んだりすることもある。彼ら自然の管理者と見る必要はないけれど、明らかに本人たちの意図とは別に、管理者の役割は果たしています。

大川も後継者がいなくなり、入札をやめた所もあります。入札をやめてみんなで平等に管理を担うという方向にいった所もありました。コモンズを維持するための条件としては、参加者の人数や資源量、経済性等があり、そういうものがひたたり合わないコモンズは維持できません。それらが変化していく中で、コモンズを維持する仕組みも変わらざるを得ないのは当然です。いま、世界で盛んに議論されているのは、多様な成員とコモンズを維持するにはどうしたらいいかという問題です。日本は、海外に比べると均質な社会と思われがちですが、実はそうではない。様々な異なる社会階層、経済階層の人々、すなわち、価値観が大きく異なる人々が、同じ空間の資源にアクセスするのが普通のことになっていきます。これをどう調整す



え方が狭い問題は「構造物」ですが、構造物を作ることと菜園化することは、別の次元の問題です。それを分けて考えるべきなのです。というのも、河川敷の菜園利用を排除するのではなく、適切な利用システムを積極的に作り上げるほうが有益と考えるからです。第1に、限られた都市空間の有効利用ができます。スヘースがないところで菜園を作りたいという市民の思いに応えることができます。第2に、河川敷を利用することで環境保全ができる。菜園は、菜園づくりを行わない地元住民からは景観が悪い、環境を荒らしている、否定的に受け止められています。それが河川管理事務所の言い分の裏付けにもなっているのです。それが問題の所在が違うのではなんでしょうか。野放図な利用や、菜園化した結果を引き受けようとなし無責任な利用が問題なのであって、菜園化そのものが問題なのではないということですが、管理システムの不在が問題なのであって、菜園化そのものは、河原にゴミを放置するようなものとは違います。適正なシステムがあれば、不法投棄などをやめさせるといった「有益な違法行為」になりうるのではないかと、菜園化することで、河川敷で菜園を作る人は、ある種の河川敷の管理者として、

河川事務所の仕事の一部を担ってくれる。少なくとも、責任ある利用者者を育てることが大事なのです。無責任な菜園利用者がいくら増えなくても、環境保全につながりません。河川を守るという責任ある人々を育てることは、河川の保全につながります。そうした人々を育成するのには、菜園は効果的だろうと考えました。第3に、菜園によって新しい人間関係を作り出すことができます。このような菜園を維持する過程では、菜園づくりを行う人が組織をつくり、一定のルールが生まれるでしょう。ムラにはそのようなルールが既にあり、都市ではこれから作らねばならない。その方法は対話です。そういう組織ができれば、河川敷の適切な管理がその人たちによって行われるはずですが、です。ですから私は、これを単純に菜園として開放しろとは言いません。年間使用料いくらで、この区画を使いなさいというだけでは、だめなのです。組織的に河川のゴミを拾うとかさまざまな管理行為に関わり、義務を負う。勝手にゴミをふるまうフリーライダーは排除しなくてはなりません。このような組織は、人間関係の希薄な都市社会に、新しい人間関係を形成するだろうと思います。川を守るための組織は、何もない

都市でも、川に関わる人間関係を産み出すでしょう。つまり、人間関係を形成するために川を使いましょうという仕組みを構築しなくてはなりません。そういう意味では、菜園作りが単なるお金で面倒な負担を避けるような行為であってはダメなのです。

人々の関係が生む「里川」

組織やルールというのは作ることも、維持して守らせるのにも骨を折ります。組織やルールが上から押しつけられたものであれば、それを守ることが大変難しいことでしょう。しかしモンスを維持している集団が、長い時間をかけて培われたルールを守ることが、成員に納得して受け入れられたこととに違いありません。実際、大川のコド漁に携わる人々には、守らないなどということは、考えたこともないという意識があります。それと、正當性も大事ですね。これも時代と地域によって違いますが、現代の社会で、平等や公正から逸脱するものはモンスとして成立しません。それぞれの社会ではなりません。また、基本的な信頼関係がある社会は発展しやすいという考え方があります。そのような信頼関係

を生む人々のネットワークを一本の会関係資本（社会资本）と呼びます。ただ人が集まっても、信頼関係は生まれません。逆説的ですが、人間関係を網の目のように作っていかなくては信頼関係は生まれません。例えば菜園を通して人間関係ができると、いつの間にかそれを越えたコミュニティがいくつもできていくでしょう。それが社会関係資本となっていくのだから私は思います。いわば、コミュニティの再生です。そのため川は資源として注目すべき存在です。

湧起と呼ばれる川の流みや淵を人工的に造っても守る人がいなく、川はきれいになりません。目に見えないネットワークが背後にあることが大事なのです。河原のグラウンドで野球をしている人々も、ただ「野球をしている」ではなく、「河川敷を利用して」いるという意識が大事ですね。自分たちが資源として見ているものを、どんどん特化していくと、資源系全体としての川が見えなくなりがちです。そうではなくて、この川がなければ自分と社会との関わりがなくなってしまう、という意識の持てる川。これが里川なのでしようね。

現代都市の

「里という居住地」とは

みんなが共有感を持つまちを持続させる谷根千の人づきあい



森まゆみ
もりまゆみ
作家

地域雑誌「谷中・根津・千駄木」編集人
東京都文京区生まれ。早稲田大学卒業。1984年に地域雑誌「谷中・根津・千駄木（愛称「谷根千」）を創刊。雑誌を続けるから作家活動とまっすぐを両立。主な著書に「開闢地人のイタリヤ」講談社、2003、「君の人間手井筒屋の九十年」晶文社、2004、「取り戻す東京の水と地」晶文社、1990、「根津の冒険」現在ちくま書房、2002。他多数。（写真左）

陣内秀信
じんないひでのぶ

法政大学教授
1947年福岡県生まれ。1980年東京大学大学院工学系研究科博士課程単位取得退学。主な著書に「水辺から都市を読む」（筑波大学出版局、2002）、「イスタム世界の都市空間」共著（前掲、2002）、「テリア」の空間人類学（法政社、2002）、「東京の空間人類学」筑波書房、1985。他多数。（写真右）



谷根千 創刊のころ

森さんたちが地域雑誌「谷根千」を創刊されたのが1984年。日本がバブルに入るちよっと前のことですね。

森 始めたころ、今までのこの地域は話題がなくて困っていたけれど、いいものが出たって、新聞記者がよく取り上げてくれたんですよ。都内版に大きく「主婦達が地

域雑誌を発刊」と出してくれたこともあります。

陣内 江戸東京ブームが85、86年からですね。その前に「谷根千」が創刊され、ブームに弾みがついたんですよ。

森 本当に冒險的なことだったんですね。というのは、地域の雑誌というのは、それまでも銀座や日本橋、深川、上野寄りにありました。けれど、それは商店街で発行していた、スホンサーと結びついた形でお店や町の紹介をしているものでした。経済的にきちんとした後ろ盾がなくて成り立っているタウン誌です。

陣内 森さんたちは地域を丸ごと理解していたし、志したものだから、然違う。そういう意味では初めての試みですね。

森 今思うと、「よくこんなことをやったな」と思います。お金も少ないのに、今で言う、起業家みたいなものでしょうからね。

陣内 どこからそんなにエネルギーが出たのかなあ。

森 外にできることがなかったから、子供が生まれて、子育てのために地域に帰ってきたわけでしょう。地域で子育てしながらできることを皆で考えて、出てきたものがこれだったんです。

陣内 確かに、小さなお子さんを抱えていらっしやう。自転車に乗せて、よく取材に回っていましたね。

森 最初は3人のメンバーに1人

■水の文化16号予告

特集「茶飲み話」(仮)

古今東西、独自のお茶文化が語れるほど
お茶は歴史ある身近な飲み物です。
いろいろな場所、いろいろな言葉で、
ちょっとお茶していかない？
と出会いが生まれたのでしょうか。
そんな「お茶コミュニケーション」
の社会史をとりあげます。



◆里川は魅力ある言葉だ。この言葉で、川の持続的管理と都市・地域づくりを、モモンズの議論で積み上げ調和させたいものだ。前号のテーマは「盆地都市・京都」だったが、期せずして前号が「里川・空間編」、今号が「里川・人間居住編」になった気がする。両方併せて読んでいただくと、また違ったおもしろさがあるかもしれない。(中)

◆タマちゃんの出現で、期せずして都市河川に注目が集まった。一過性と思いきや、意外にもタマちゃん効果は持続している。やはり、生き物の持つパワーには、強く興味をひかれるものが潜んでいるということか。里川を考えると、目の前にはタマちゃんさえ嫌がる川が存在する現実がある。「里川の空想」とならぬよう地に足をつけた活動にしていきたい。(ゆ)

水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せ下さい

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水との関わり」に焦点を当てた活動や調査・研究などをご紹介しますまいります。

ユニークな水の文化楽習活動を行っている、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究を行っている、こうした情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はモノクロで皆様に配布しておりますが、写真をはっきり見たい!というご要望にお応えし、11号からはホームページにてカラーでバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

ホームページアドレス <http://www.mizu.gr.jp/>

編集後記

◆年初の企画会議で今回のテーマが決まったとき、これは大変なことに取り組んだものだと少し不安を感じました。しかし、さまざまな識者のお話を伺ううちに、これは水の文化面のみならず将来の国家的課題として捉えるべきだと強く感じました。「里川とコンパクトシティ」は自然や環境、人間と社会が織り成す巧妙な協働作業であり、長期に渡って持続的に取り組むべきテーマです。(吉)

◆買い物やレジャーで車を使うことが多くなりました。便利で行動範囲が広がる一方、大事なことを見落としてしまっているのではないかと不安も覚える。わざわざ遠くに行かなくても、近くに本当の豊かさがあるのではないかと、とも思いますが、生活する上で心を癒す大事なものは、近くにありますか? ただ傍観するだけではなく、積極的に関わっていくことで、面白いことを身近に発見したい。(口)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第15号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

※禁無断転載複製

発行日 2003年(平成15年)10月

企画協力 壽田由紀子 京都精華大学教授 梶尾朝博 博物館研究顧問 水と文化研究会世話役
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授

編集発行 吉田 稔 小林 信 日比野容久 小林夕夏 中庭光彦 賀川一枝 賀川黎明
ミツカン水の文化センター

〒475-8585 愛知県半田市の中村町2-6
株式会社ミツカングループ本社 広報室内
Tel. 0569 (24) 5087 Fax. 0569 (24) 6353

ミツカン水の文化センター 東京事務局
〒143-0016 東京都大田区大森北2-2-10・4F
Tel. 03 (5762) 0244 Fax. 03 (5762) 0246

お問い合わせ